



現今
宗匠

撰句百家集

鳳井五明編撰
一名口調のきりかへ

下

5
4659
2



門 5
流 4659
巻 2

松の皮を剥き
淡色の紙を貼
りしり粘り
白蜜を塗り
る



松壽軒尚九

八巻氏
中橋南鞆町芝番地

松の皮を剥き
淡色の紙を貼
りしり粘り
白蜜を塗り
る
汁鍋や指を
煮るに掛る

松
白蜜
物の海

百家集

卷之七

七五

昭和十六年一月十一日寄
尼野貴英氏贈

不去菴完岱

赤坂田町四丁目

作意すり
白くぬま
ふらふらの
ふらふらの
ふらふらの
ふらふらの

袖

を自
袖
藤の

水のまはよの田所や花
たつとて霞をまはるや
世のまはよの田所や花
水のまはよの田所や花
水のまはよの田所や花
水のまはよの田所や花
水のまはよの田所や花
水のまはよの田所や花
水のまはよの田所や花
水のまはよの田所や花

作意すり
ふらふらの
ふらふらの
ふらふらの
ふらふらの

袖

を自
袖
藤の

玄林堂柏二

馬場氏
品川本宿二丁目

子を作み程を水ありぬ菜梅
麦ぬみで笛子あつ子や揚を
所の又さう深きまの入江くれ
唇うさげのうさげのうさげの
瓜をよとつたうり餅をさる
人中城障の舞うりつる所
石口さきまうりつる麻の子くれ
指をさる人ま交うりつる
池まうりつるのあり城を
古村強まうりつるのあり

合歡菴貴邦

筒井氏
地 芝三田君塚町十五番

白雲の煙を
そよと吹く
さよと飛ぶ影の
こがれ物さ
うきとあはれ
ほろりと

袖

伊豆すそを

軍門を

よきの冬

とあつりし長き黒く煙の香
あちこちを月夜に七曲り
ねとまじりて三子もろく炭たつり
喜ぶ人の影をさや常のあまこが
約にまじりておの月を縁を
袖一ツ袖もろくおの月を
まじりておの月の上を
あまおの月を
る子おの月を
炭焼もろくおの月を

此言人情を
宗一述懐
をきく
をきく

袖

元の

並物

は

不説菴五雀

葛山氏
本挽町三丁目薬師堂

おのるを痛くけり日本
あまおの月を
ねとまじりて
喜ぶ人の影を
約にまじりて
おの月を
袖一ツ袖もろく
まじりて
あまおの月を
る子おの月を
炭焼もろくおの月を

鈍庵硯壽

近藤氏 野州加茂郡平方村

とていし子儀き
たつ白生たのり
ゆるきし様とを
考へて

油

持備は
なや
ま
ま
ま

水舟や花い 著るる子一ト所
世より寸のあうより 晴くまの二田
実とや乙子も 籍一町の中
是るか明色より 一徳と丸
世より子下終一のさるるの石口丸
いつぬく小山とあ 一秋の月
在招ききの秋せ笠を打本の葉丸
いまきの輝るの似きをあ丸
若るや油粒あき樹の伸のよき
今更子行帆をたれ 除表の海

太向堂晴子

根津宮番三二番地

任弱きあれは
先ッを後まの
方々(平)

袖

川ぬやゆの
ゆるるを
まじり

仰きあふるふのうさよ 夕干 四
お子裁せいの葉をくくん子丸
終の層く葉きり 終や 時 有
ふるま子 積るま 竹牡丹丸
厚葉のあるや 樹の 後る 丸
初るの菊香のちる丸 一竹の巻く
算りうや 終つて 巻のふ 葉内
ふもや 江子 けり 一 丸の 新
日向き 丸子 山葉子 垣 根 丸
香き 丸 終る 丸 葉子 丸 針

柳隣存長

青島氏 神田錦町五番地

此意は新子と
好み言つたり
たを好む
今も人様
口好むは

袖

冬入れ
袖曳れ
山の月

あまのけしは海の中よりあまの魚の
お地うらやうら小家の業の業
端端や生かす志をいふの春
まきまの用なき壺極輝り
葎花のよの夜更や泊り川
坂屋城の消しと灯の白く丸
民の衣を月の際なき結ぶ丸
種ひくや杖の木の葉揺り
丘雲と石片をそそぐ雲佛
江子ほろ下ふつたりや雪の里

白化子枝り
を味はすに
点ありて
あひあひ
やうやう

袖

眼子
深森

閑樹園菊雄

青山氏 深川牡丹町二番地

旅るる村や小春社極歩
空の座の時針屋寸や更さ
水多や葉をのそまはさ
小社の名を摘す小春り丸
里うらの鎌子ある藤や
箒のゆき度子濃くある紅葉丸
去りゆくはたきまき丸
飯汁や雪を多しとふ中
引ゆるまきまき丸
種るる花の静きよう水柳

震柳居春喬

吉田氏 深川黒江町九番地

此をいふ山柳
とて深松を
後の句を
と有り秋の
孤あらんを

袖

世々との
都えまわ
権の奴

狂心物狂まぬ
足長れつまる足の下り冬の
春も涼しとのけり
行秋や樹のとり先子春一羽
ぬれ柳や柳柳の
初冬や冬にけり
山菜もや里磯人の秋
節の日や秋とけり
夕云や秋とけり
空月の志も也をやきし

穂やうあつ穂を
好、穀の穂を
甚嫌う時依の
よるをまわ
よる

袖

穂の
昔の
夕つる

竹立菴晋江

高木氏 深川伊勢崎町二十
九番地

成りては
春雨や春も
出る春も
春の
時
号の
梅の
夕
吹風

白濁すりし
し今一能は
ぬめり程めき
了々今も

袖

嬉し
成は
し
茶小椀

三戒堂芳艸

大堀氏
久松町四十二番地

わろくはる坂とくく小椀
ぬめり程めきのやい
椀茶や練つき介以
山崎の一人ん
砂屋やふま度
赤いつく
夕時や山
初まや今
茶のまは
刈のま



年
あ
あ

袖

ぬめり程めき
手向水の
茶小椀

閑月庵醉外

横濱元町

朱を
雪
あ
ま
笑
屋
茶
舟
出
鴨

作意無染
調ふまじき
あり香のそ業
ありまじき

袖

去るよりの
今年の
月の
光り

金港舎其峰

横濱太田

天より下りてありて
今日きりて思入程
交りまじき海
返るべきを
橋の名を
菘さるや
ありて
玉川
終り

秋夜庵山端

小向水道町三番地

白蛇
しん
子

袖

白蛇
しん
子
秋の
光り

秋夜庵山端
小向水道町三番地
初秋
藤
中

時候の言ふる白
打んくも候はる白
よまのま候はる白
雪言ふま

袖

おのろくも
んんん
切替り

且暮菴乙朗

鈴木氏

麴所六丁目千九番地

毒の毒けぬ身も涼し夏の月
懐箱の成春さす時分片端
おろくもあつぬ四五羽の雀
紫陽花もあつぬとくはあつぬ
羽おろく程さく口はあつぬ
おろくもあつぬおろくもあつぬ
石葛やあつぬあつぬあつぬ
あつぬあつぬあつぬあつぬ
あつぬあつぬあつぬあつぬ
あつぬあつぬあつぬあつぬ

人情世帯の
活めさたる白
あつぬあつぬ
伊達あつぬあつぬ
あつぬあつぬ

袖

あつぬあつぬ
あつぬあつぬ
あつぬあつぬ
あつぬあつぬ

夜松庵史雪

田中氏

麻布丹波谷

あつぬあつぬあつぬあつぬ
あつぬあつぬあつぬあつぬ
あつぬあつぬあつぬあつぬ
あつぬあつぬあつぬあつぬ
あつぬあつぬあつぬあつぬ
あつぬあつぬあつぬあつぬ
あつぬあつぬあつぬあつぬ
あつぬあつぬあつぬあつぬ
あつぬあつぬあつぬあつぬ
あつぬあつぬあつぬあつぬ
あつぬあつぬあつぬあつぬ
あつぬあつぬあつぬあつぬ

玉兔庵竹苞

並川氏

數寄屋橋内有樂軒

此の如くぬる時
後おけりし月
字点あつて丸
しきほどあつた
しきり桑木
よりりりり

袖

蘇あつて
んまま
後の
月赤く丸

去たれや葉を吹
ま田や揚子ふき
沙くも水もき
雨やうしと
降中子曉
山とあつて
あつて
刈とて
空月や
枯くま

旦雪庵木寶

鶴殿氏

市谷本村町三十五番地

作意すり
と葉の
そと
横糸の
字点あり

袖

葉の
白
年の病

初や
お雪
空
あつて
付
降
静
常
葉
葉

一具庵尋香

小川氏 駒込西岸所安部候郎内

夕暮人懐明飲
の情を世の他世
を一時の粗句
やいふは
大いよ嬉了

袖

葉のせき
清の底
残影板

香葉のてはり拂ひぬ若清の
掃く先もあやうあり毛わ
葉の身もまきゆきお葉う丸
白くこの移る 杉戸や 白牡丹
引筋のあうらさきと 空車のは
夕夕いと成りてくう初花子
山裾や一寸を刷毛お意
地もく葉を慰むの若のう丸
初花の人よあう水う月羽 残
影やあうて 掃く女宮

隨巢三令

會持氏 本所松會町

うき
生かす
木をよそ葉
いふは

軸
子夜の内
籠りの
扉の敷

夕の葉や足くはる人のゆいぬ交
葉の身や叶を慰むの若のう丸
葉の身やあやうあり毛わ
葉の身もまきゆきお葉う丸
白くこの移る 杉戸や 白牡丹
引筋のあうらさきと 空車のは
夕夕いと成りてくう初花子
山裾や一寸を刷毛お意
地もく葉を慰むの若のう丸
初花の人よあう水う月羽 残
影やあうて 掃く女宮

墨華菴芋鳩

阿久津氏

千佳二丁目六百十三番地

白き子蘇葉
河れはあけ
しるふふ
たきよ

袖

拾粉や

菊の面よ

秋の月

波のちを成りて世におほらん月
いそねうしあふまうのほれ雪
しるふの柳もあふまうのほれ
物にあふまうのほれ
年月雨や葉にぬれを苔清水
人のまを掃きあふまうのほれ
あふまうのほれ
今の日やあふまうのほれ
水香の菊もあふまうのほれ
時雨もあふまうのほれ

星霜菴白頭

田中氏

赤坂新坂町辛四番地

おふりて休林
あふまうのほれ
あふまうのほれ
あふまうのほれ

袖

鋪の尾も

輝くふん

青く

明月戸のちを成りて世におほらん月
いそねうしあふまうのほれ
しるふの柳もあふまうのほれ
物にあふまうのほれ
年月雨や葉にぬれを苔清水
人のまを掃きあふまうのほれ
あふまうのほれ
今の日やあふまうのほれ
水香の菊もあふまうのほれ
時雨もあふまうのほれ

星喜庵北因

向井氏
麻布市兵衛町七十
四番地

人情をうらや
みし人の心
をよき事
にすまはし
御座るの
由余さるる

袖

庭をうらや
みし人の心
をよき事
にすまはし
御座るの
由余さるる

袖のまやゆめやうらや
みし人の心
をよき事
にすまはし
御座るの
由余さるる

梅園菊成

渡辺氏
小石川諏訪町三番地

七五二
七五二
七五二

袖

人情をうらや
みし人の心
をよき事
にすまはし
御座るの
由余さるる

梅園菊成の
人情をうらや
みし人の心
をよき事
にすまはし
御座るの
由余さるる

莫爭先杏堂

宇津野氏 下谷西黒門町十九番地

人情有可憐
然亦多事
上り作らば
面おもひ
足らぬの
行要し

軸

是も世の
誰か教
養多

鬼灯戸ニツ 親三のふ 照身立
斗るよ山 耕うけ 筋や
色をわ 水いり きのの 石川
うら 財布 振れを 略し 立れ ちり
花活 一さく 立位 糸 綿 種 九
鬼門 下 けり ちり 中 序 一 筋 角 力
惚て 志めり 棺の 釘や 相一 葉
秋 序 や 夢の 心 空 ちり 水 玉 の 妻
吾 分 ち 二 人 けり 振れ ちり ちり 九
友の 月 板 ちり 振れ ちり 九

作らば
多き
作らば
多き

軸

そや
呼おす
姓の

稻掛庵芦城

井上氏 新富町三丁目四番地

きん 伊 ちり ちり ちり ちり 川 向 入
二ツ 三ツ 藤 盾 ちり ちり ちり ちり ちり
五月 二日 ちり ちり ちり ちり ちり ちり
斗り ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり
行つ ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり
ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり
踏 臺 の 葦 ちり ちり ちり ちり ちり ちり
余 所 ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり
指 紐 ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり
冬 の 山 日 ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり

笠庵器成

渡辺氏 四谷舟町早八番地

人情多しき
名夏の白子
夕才五上三行
をぬむとせ

袖

怪こし
葉一ツ
乞ひぬ
夕たそ

曳舟や芒の中を漕ぐけり
夏は月生海の福撰せり
後まきやらの縁方の程結
初秋のききり子ねぬる毎の落
惆や八里の河を流す風只
薫るのやる毎を清き雷の陣
牛の背に牡丹の落し多し
種魚の流す濁りや芒川
陸日和字俗の柳うさぎ
よまもあそむ樹を妙く守る

此言のあらはし
ふとくしるる
時世のあらは
何れもあらは
白くあらは
言ふと

袖

宵の白子
まゆ
まゆ
ぬる

花垣連夕

大久保氏 牛込西五軒町五番地

星の光のついでに
葉子力たけり
あそびあり
名蘭のついでに
無常のついでに
あそびあり
手枕のついでに
あそびあり
あそびあり

異籬庵機一

田邊氏
神田須田町

手繰りて
おろしき
おろしき
おろしき
おろしき
おろしき

軸

手繰りて

おろしき

おろしき

おろしきよよ月を又と曾く丸
忘るれを忘れたるよきる丸
おろしきのまよきる丸
おろしきのまよきる丸
おろしきのまよきる丸
おろしきのまよきる丸
おろしきのまよきる丸
おろしきのまよきる丸
おろしきのまよきる丸
おろしきのまよきる丸

おろしき
おろしき
おろしき
おろしき
おろしき

軸

おろしき

おろしき

おろしき

籬丈庵乙外

加藤氏
深川木場町七番地

おろしきよよ月を又と曾く丸
忘るれを忘れたるよきる丸
おろしきのまよきる丸
おろしきのまよきる丸
おろしきのまよきる丸
おろしきのまよきる丸
おろしきのまよきる丸
おろしきのまよきる丸
おろしきのまよきる丸
おろしきのまよきる丸

律雪菴律露

安部氏 通油町七番地

くまの雪一可
時休はう言せ
優の友あう白
衣のあま

袖
い落る雪
はる
梅ころれ

雪子の移りもや
影の根子も
中行や苗の
落すも白く
蓬草の影も
水も清く
時ありぬ
葉馬の

菊守園喜山

武州所澤

いふやうあ
菊の
先のと
うとあ
字とあ

袖
香を
梅の
梅

秋晴や初秋
是れは秋を
咲きや
菊は
花の
夕日
麻
雨
水
雨
雨

琴月園眠居

小川氏
四谷坂町六番地

そよ風の働き
白くはるかに
静かなる心
あはれ

袖
白くはるかに
静かなる心
あはれ

おとすけやあはれ
山をまき
梅うつれ
白くはるかに
静かなる心
あはれ
文々々々
菫麦や
梅より
虫の音
鈴こま
お魚や

白くはるかに
静かなる心
あはれ

袖
白くはるかに
静かなる心
あはれ

八葉謝徳

伊勢町九番地

梅うつれ
白くはるかに
静かなる心
あはれ
文々々々
菫麦や
梅より
虫の音
鈴こま
お魚や

聽芦窓月叟

本郷氏 神田連雀町十八番地

夕浦子燈りて
足跡の影に
下なる字一
あふをりつ
好むをりつ

袖

五十一番子
きん
牙
糸
乾

葉も雪宇治を痛くしぬ絶えなく
花のうらみも雪をたけり餅きり
葉の宿る鳥も雪をたけり雪後
明ぬぬや群れをたけり雪
明ぬぬや群れをたけり雪
縮素や群れをたけり雪
よのよの雪をたけり雪
生垣や雪をたけり雪
葉も雪をたけり雪
舟の舟や雪をたけり雪

文來庵文來

大河内氏 本所永倉町

白紙の易体は
一の麻葉り
有て好まぬ
世落時の傷き
あつたうし
けつたうし
言志り

袖

せき
枯るるは
冬こり

雪も雪宇治を痛くしぬ絶えなく
花のうらみも雪をたけり餅きり
葉の宿る鳥も雪をたけり雪後
明ぬぬや群れをたけり雪
明ぬぬや群れをたけり雪
縮素や群れをたけり雪
よのよの雪をたけり雪
生垣や雪をたけり雪
葉も雪をたけり雪
舟の舟や雪をたけり雪

栗菴宇山

間宮氏 上槇町二番地

三葉の傷き
あつてうき
あつてうき
あつてうき
あつてうき
あつてうき
あつてうき
あつてうき

軸

あつてうき

あつてうき

修保好や中々りくの小風号
つれづれまの生を終る新葉梅
実あけの恵の先より明の生
梅子ゆつ月後気もも号 茶
在湯の茶座の夏も
すくすくや井田網の据和
園子のりふの雨の雲のちうり
空ちうりやわ子の茶のちうり
路先や上着ぬくのちうり
男の園の時雨の茶のちうり

古常庵幽松

中村氏 四谷南伊賀町五番地

淡世派のあ若
うきうき
うきうき
うきうき
うきうき
うきうき
うきうき
うきうき

軸

あつてうき

あつてうき

葡萄やめり松修のり承り
うきうき猫生壁の丘研んとす
秋の元日山あり片田 雲
瓜の齋雷干もぬり
小橋の年のあつてうき
約あつてうき
淡さめり耳うき
秋空や親子屋の親の用
去年の梅子の梅子の梅
車屋や水も梅のちうり

齡雲齋點瑟

窪田氏
淺草龍泉寺村
乃十二番地

夕月や雀を瘴の盡きたる
角簾や布雲の上は落し角

軸

夕月や雀を瘴の盡きたる
角簾や布雲の上は落し角

井くけりて命の糸一糸
夕月や雀を瘴の盡きたる
角簾や布雲の上は落し角

田喜菴詩竹

渡辺氏
深川水堀町三番地

夕月や雀を瘴の盡きたる
角簾や布雲の上は落し角

軸

夕月や雀を瘴の盡きたる
角簾や布雲の上は落し角

夕月や雀を瘴の盡きたる
角簾や布雲の上は落し角

蒼々臺五泉

大橋氏
芝宇田川横町臺番地

流り易き水
あつたふまへ
蛇中下女又家
より此寺のま
まあつたふまへ

袖

桐の葉
常の葉
雨後の月

梅雨の葉のまへ
あつたふまへ
蛇中下女又家
より此寺のま
まあつたふまへ
白雲の雨のまへ
あつたふまへ
蛇中下女又家
より此寺のま
まあつたふまへ
雨
我のまへ
あつたふまへ
蛇中下女又家
より此寺のま
まあつたふまへ
梅雨の葉のまへ
あつたふまへ
蛇中下女又家
より此寺のま
まあつたふまへ

鳥歌園花朝

久住氏
深川佐賀町

女物のまへ
あつたふまへ
蛇中下女又家
より此寺のま
まあつたふまへ

袖

帷子の葉
あつたふまへ
蛇中下女又家
より此寺のま
まあつたふまへ

鳥歌のまへ
あつたふまへ
蛇中下女又家
より此寺のま
まあつたふまへ
園花のまへ
あつたふまへ
蛇中下女又家
より此寺のま
まあつたふまへ
朝
我のまへ
あつたふまへ
蛇中下女又家
より此寺のま
まあつたふまへ
鳥歌のまへ
あつたふまへ
蛇中下女又家
より此寺のま
まあつたふまへ

他處優美を
好む下なる言子
とあるは是の方
久しき人情
まづいふや

袖

初冬の
風をさす
柳に

芙蓉庵富水

西谷氏
小石川區大塚町
八番地

昔より裁寸物を好む冬の小
州の田舎に又白く雪の下
冬を知りぬ庄司の庭に
幾も忘れぬ夏の小
上より袖をさするも
少くもさするもさするも
冬よりさするもさするも
秋よりさするもさするも
春よりさするもさするも
夏よりさするもさするも
冬よりさするもさするも

面をさするも
初冬の
風をさするも
柳に

袖

文ある
初冬の
風をさするも
柳に

七種菴婦

龜氏
淺草十束村三百卒
三番地

うけ針の短かき
冬よりさするも
初冬の
風をさするも
柳に

蹄雪庵伯志

前田氏
小岩川諏訪町三九番地

今も人懐
時傳の持念を
物の言えども
すて言えりり
よき言えりり
よき言えりり

袖

福茶末や

雨の聲を

音みより

人懐く言ひしよ
枕も好ましくも
床も好ましくも
夜も好ましくも
月も好ましくも
雲も好ましくも
雪も好ましくも
雨も好ましくも
風も好ましくも
花も好ましくも
鳥も好ましくも
虫も好ましくも
木も好ましくも
石も好ましくも
山も好ましくも
水も好ましくも
火も好ましくも
土も好ましくも
空も好ましくも
地も好ましくも

白紙を
白紙を
白紙を
白紙を
白紙を
白紙を
白紙を
白紙を

袖

文あらし

春の

ゆき

咲か

叱齋起石

田口氏
牛込神樂町

水も好ましくも
火も好ましくも
土も好ましくも
空も好ましくも
地も好ましくも
山も好ましくも
水も好ましくも
火も好ましくも
土も好ましくも
空も好ましくも
地も好ましくも
山も好ましくも
水も好ましくも
火も好ましくも
土も好ましくも
空も好ましくも
地も好ましくも
山も好ましくも

時佐子付ひる由
只いふ人あまの
才く懐く
作言言言点り

軸

時
時
時

有竹居正義

上野國前橋相生町
第五号

時佐子付ひる由
只いふ人あまの
才く懐く
作言言言点り
時佐子付ひる由
只いふ人あまの
才く懐く
作言言言点り
時佐子付ひる由
只いふ人あまの
才く懐く
作言言言点り

噴旭亭蓮所

淺草鳥越

時佐子付ひる由
只いふ人あまの
才く懐く
作言言言点り
時佐子付ひる由
只いふ人あまの
才く懐く
作言言言点り
時佐子付ひる由
只いふ人あまの
才く懐く
作言言言点り

蔦の本悟秋

西堀氏
麻布櫻田町

生りしとて
中子一匹あるを
ぬりあつて
白子うま
まね

軸

只一あるの
あつた
角の

色あけく、映ぬす人を押へく
藤花の月一朶を吹く
の房戸の月一朶を吹く
顔杖の宿の月一朶を吹く
魂桐の月一朶を吹く
笛子の月一朶を吹く
出た秋の月一朶を吹く
鳴るる月一朶を吹く
雨あつて、枕を吹く
あつた、あつた、あつた

眠芳庵露逸

坪川氏
四谷右京町三番地

とて
白又と葉の
字より歩
あつた

軸

友のあつた
よのや
あつた
字のあつた

まのあつた、あつた、あつた
あつた、あつた、あつた
あつた、あつた、あつた
あつた、あつた、あつた
あつた、あつた、あつた
あつた、あつた、あつた
あつた、あつた、あつた
あつた、あつた、あつた
あつた、あつた、あつた
あつた、あつた、あつた

花の本静正

村山氏
幸三番町廿五番地

合休するにても
其の意は
多易休のゆゑ
多き利に
身一人情も
さう

神

老生也
何人

嶺下物草花古一花乃門
海苔子所あきとて世と写け
と利小山葵子のや共の
さう一井の持形も
度の方をさよと並り
ぬきとて花Aをさ
船魚や流れは
輝る輝や足は
ゆき水や心
初雪や降る

何人
為未内記



明治十五年十月二十日出版御届
同 年十一月 日刻成出版

編輯人 和田常七

京橋區南小田原町三丁目
北六番地

發行者 井上勝五郎

京橋區南紺屋町
壹番地

